

その7 「ハケンの品格」の品格

油井 文江

株式会社ゆいアソシエイツ代表 中小企業診断士

昨年の人気TV番組「ハケンの品格」を遅まきながら観ました。主人公である大前春子は超のつく有能派遣。資格を30も持つ“スーパーキャラ”は荒唐無稽ですが、テーマは「自分らしい生活を送れる社会とは？」を問うしごくまっとうなもの。会社組織や働き方への視点が可笑しみを生むシリーズでした。今回はこの番組や派遣について取り上げます。

1. 派遣の世界

お話の設定は、「正社員が無能だから派遣がお時給をいただける」と、実力派派遣の主人公が堂々たる能力で会社に隷属しない働き方をやってのけるというものです。出世や日々の業務に右往左往する社員の生態、細かく差別される派遣の実態など、織り込まれる描写はリアルです。

終盤で大前春子は元一流企業のリストラ組と知れます。ヒューマンスキルゼロの可愛くない？春子ですが、リストラ後の涙ぐましい努力を想起させて、愛しいヒロイン像に変わるのが憎いところでした。

(1) 笑っている場合か？

社会派テイストのあるこの番組、当初は視聴率に不安があったとか。しかし全国320万人の派遣層はもちろん、幅広い共感を博して評判になりました。

今TV業界は安い制作費で視聴率を上げることばかり考え、お笑いや猥雑なバラエティ

一へと傾斜しています。その低級化路線は安ければいいという市場経済の社会性のなさを映し、品格どころの話ではありません。

「テレビが消える日」の著作で有名なアメリカの経済学者ジョージ・ギルダーは、「テレビが低俗なのは、人間が低俗だからではない。人間の興味や関心が多種多様な中で、性的なものや猥雑なものへの興味だけが広く共通しているにすぎない」と言いました。TVというものは、手っ取り早く視聴率を稼ごうとすれば番組内容の低俗化が避けられないというわけです。これは番組制作者も視聴者もしっかり認識しておきたい点です。

「ハケンの品格」はエンターテインメントですが、笑って終りにならなかったのは、制作サイドがノンエリートの派遣や働く人の側に立つ視点を持っていたからでしょう。視聴率は、社会との共感を喚起する「頭」で稼ぐもの、という例証にもなっています。

2. 利益追求の落とし穴

(1) 忘れてならない暗い歴史

目先の視聴率や利益に走り低級化するのは、TVだけでなく市場経済に共通の問題です。企業の利益追求は、昔から安い労働力を求めて派遣業を生み、なかには劣悪なものも存在しました。近代以降でも明治時代の女工幹旋業者、港湾労働の口入れ屋などが悪名高く、一步間違ると悪徳となる人材幹旋業の歴史を私たちは知っています。

最近、大手派遣会社の二重派遣が問題になり、被派遣者が行き先も告げられずトラックで運ばれる事実が明らかになりました。まるで古いドキュメント映画の、底辺労働者の選別と搬送シーンのようです。

最近観た映画、「モーターサイクル・ダイアリーズ」(2004年ウォルター・サレス監督。エルネスト・チェ・ゲバラの青年期の物語)では、南米の鉱山労働の手配師とトラックで運ばれる労働者のシーンがありました。60年前の貧しい国の姿ですが、現代日本との類似ぶりは、歴史への無自覚を示して残念です。派遣業界は規制緩和が続きますが、過去の行き過ぎた歴史が規制を生んだことを忘れず、「下層食い」の悪相業界になりかねません。

(2) 雇用の品格

人の雇用には経済性だけでなく倫理性が必要です。日本は石を投げれば派遣社員に当たるといわれるほどの派遣ばやりですが、儲けているのは派遣会社と雇用企業といわれる現状があります。派遣会社は賃金の50~60%を取り分とし、収益率も毎年上昇。企業は報酬をカットした以上の利益を上げているなどです。

経済評論家の森永卓郎氏によると、2001年度から2005年度にかけての雇用者報酬は、非正社員を増やしたことで8兆5千億円以上減少し、逆に企業の利益(営業余剰)は10兆2千億円増加。利益の行き先は株主と大企業の役員で、株の配当金は3倍に、大企業の役員報酬は1.8倍に増えているといえます。

前述の「ハケンの品格」では、社員食堂のカレーライスの値段が、派遣社員は正社員の2倍でした。非正規雇用で利益を上げながら、雇用者負担は派遣会社に回し、取れるものならちょっとでも弱いものから取るという「経営の不道徳性」には品格もなにもありません。

派遣は無責任、頼む戦力ではないとの声も聞こえますが、品格のない扱いはやる気を生みません。社員を生かすも殺すも会社次第。弱い立場の社員にはなおさら配慮が必要です。



イラスト：すずき 匠

3. 大前春子さんの電話のマナー

ところで、スーパー派遣大前春子の弱点はヒューマンスキルがないことでした。専門能力の提供だけで十分と、無口で声音も愛想なし。電話に出たら(相手も会社も)怖いぞ~というタイプです。そういえば春子さんの電話シーンは問題発言で社員を総立ちさせた1回きり。ここでは、そんな春子さんに伝えたい「最低限の電話のマナー」をあげましょう。

- ・かける時間帯に注意：始業時、昼食時、終業時を避ける
- ・まず挨拶と名乗り：「もしもし」は不要
- ・相手の都合を確認：「ただ今お時間はよろしいでしょうか」など
- ・明るい声で：普段より1~2音階高目に
- ・聞くときは適切な相槌を
- ・電話をきるのは相手がきってから
- ・受話器はガチャンと音を立てて置かない
さて、皆様の電話マナーは万全ですか？

皆様のご意見、ご感想をお寄せください。

油井 文江

(ゆい ふみえ)
横浜国立大学卒業。企業広報に携わった後独立。女性のビジネス支援、流通・サービス業のコンサルティング、創業、CS等の研修・執筆に従事。経済産業省政策審議委員等を歴任。

